概　要　報　告

実施期日	８月５日(月)
部　会　名	小学校　体育部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

テーマ

『保健・体育の授業で思考力、判断力、表現力等を育む』

～協働的な学びを目指して～

提案概要

【研究の概要】

これまでの保健の学習では、児童の興味・関心が高まっている姿が見られた一方で、調べた内容を他者に伝える際に、うまく文章にまとめることができなかったり、言葉につまってしまったりする場面が多く見られた。

その背景として、新型コロナウイルスの影響があったのではないかと考える。対象児童は２年生の頃からコロナ禍での学校生活となり、伝え合い・話合い等の活動の制限を受けて高学年となった。昨年度からコロナ前のような学校生活を取り戻しつつあるが、アンケート結果からも、人への伝え方や人との関わり方に苦手意識をもっている児童も多い。国立成育医療研究センターの調査結果においても、対人関係において話しかけにくくなったと感じている子が多いことが分かる。

このような課題から、関わる学習活動を通して、自ら考え行動し、心豊かでたくましい子の育成を図るために、「分かる」「できる」を育み、コミュニケーション能力、思考力、判断力、表現力等の育成を図ることが必要だと感じ、今回の実践を試みた。

【実践の概要】

１、学習用端末の活用
　①デジタルコンテンツ（議論の活発化）
　②Google Mapのストリートビューの活用（学びを実生活につなげる）
２、確かな技能の定着に向けた工夫
　①ロールプレイの実践（必然性をもたせる対話）
　②ゲストティーチャー（養護教諭）の参加（技能を確実に身に付けさせる）
３、適切な交流活動の設定
　①異学年交流活動の設定

【成果と課題】

「学習用端末の活用」と「確かな技能の定着に向けた工夫」の実践を通し、知識及び技能を確実に身に付けさせた結果、「適切な交流活動の設定」の実践で自信をもって取り組むことができた。

「自分の考えを他者に伝えること」に対しては、３学期に行った「プレルボール」の学習時に作戦タイムを設けたところ、時間になっても話合いをしているチームが多かった。教師の指示がなくても、「自分はここで打ちやすいから、トスをするときにはここに出してほしい」などと自分の考えを伝え合う姿が見られた。また、「バスケットボール」の学習でも、シュートまでつなげるためにはどのように動けば良いか細かく作戦を立てる姿が見られた。試合中もお互いにアドバイスをする姿が見られ、これまでの活動が生かされているように感じた。生活場面においては、これまで擦り傷を負った際に「絆創膏をくだ

さい。」とだけ伝えていた児童が多かったが、活動後には、擦り傷を負ったらまずは自分で傷口を水で洗った後に「絆創膏をください。」と伝えてくる児童が多かった。その他にも、鼻血が出た児童がティッシュを鼻に詰めようとした際に周りの児童が「詰めるんじゃなくて、鼻をつまんで下を向くよ。」「何か冷たいもので冷やすんだよ。」と教えている姿が見受けられた。記述内容からも、今まで人と関わることに消極的だった児童が、異学年交流を通じて関わることに喜びを感じたり、教えることに対して手応えを得たりしていることが読み取れた。

アンケートの結果からも、「人に自分の考えを伝えること」について「得意だと感じない」と回答した児童が事前では９人であったが、事後では０人であったことから、今回の活動を通して、自分に自信が付いたことで、肯定的な回答が増えたことがわかった。

質疑応答

質疑応答はなし。

協議の柱及び協議概要

１、「協働的な学び（異学年交流）について」

・所属校や近隣の学校では１学年１クラスの単級が増えている。ブロック（低・中・高）ごとに動くことが多い。特に、運動会の表現活動においては、ソーラン節やエイサーなど、上の学年が下の学年に教えることもある。

・夏休み明けに実施予定の夏祭りに向け、「１・２年生に喜んでもらえるような夏祭りにしよう」と張り切って取り組んでいる。内容についても、児童が考えたゲーム（体育館でボールを使った人間ボーリングや、前転しながらピンを倒す）を採用する。子ども発信にすることで、主体的かつ意欲的に取り組むことができる。

・３・４年生の体育で「リレー」の学習を行う際に、バトンパスの行い方を教え合っていた。また、５・６年生の「ベースボール」でも共生体育を意識しながら異学年が関わる時間を作った。

・「育ちゆく体とわたし」では、ゲストティーチャーとして養護教諭に来てもらい、いつもと違った雰囲気で、特別感を感じながら行うことができた。担任が男性である場合も有効に働くことが多いように感じる。

・体力テストをこれまでは５年生のみが行っていたが、今年度は全学年で実施した。ペア学年をつくり、上級生がやり方や説明を行ってみた。異学年交流にもつながり、一定の成果が得られたと感じている。

２、「学びを実生活につなげる授業づくりについて」

・保健の学習はイメージが湧きやすく、実生活にもつなげやすい。

・ペアで話し合うと、どうしてもコミュニケーションが苦手な子もいる。３人か４人いた方が、多くの意見を聞くことができるし、さらにもう一歩踏み込んだ意見交流が期待でき、深みも出るのではないかと思う。

・カリキュラム上、時間との兼ね合いはあるものの、話す・発散する、またはそれらの方法を学ぶなど、今後ストレスを溜めない手段を知ることも大切だと考える。

・保健の学習で得た学びを総合的な学習の時間につなげることで、カリキュラム・マネジメントにつながる。教職員の共通理解や組織的かつ計画的に取り組むことが大切である。

まとめ概要

今後の学習においても、他者に自分の考えを伝える際はどのようにすれば良いのかを考えるきっかけになったのではないかと感じる。課題としては、保健学習にどう興味・関心をもたせるのか、手立てや教材分析における難しさを感じた。けがの防止について理解したり、簡単な手当てができるようになったりすることは目標ではあるが、それ以前に、けがの手当を行う必要のない生活を過ごしてくれることを願っている。